

今日は知っているようで知らない、^{だるま}達磨さまのお話をしましょう。

皆さんがよくご存じの達磨さまは、顔以外は赤い色をして起き上がり^{こほし}小法師のような形をした達磨さまではないでしょうか。

では、達磨さまのほかに頭^{からだ}から身体^{つな}にかけて繋がった布^{おお}で覆われたお姿の仏さまやお坊さんの像などを、ご覧になったことはありますか？ 中国でなら、そのような肖像画^{しょうぞうが}、つまり頂相^{ちんそう}などがあってもおかしくはありませんが、ほとんど見かけることはありません。

あの達磨さまが身につけている赤い布は、「被^{かぶ}る」という字を書いた「被（ひ）」といます。中国のような寒い国では必要な物だったので、という「特別な着物かな？」と考えてしまうかも知れませんが、実は「被（ひ）」とは、横になって眠る時にも掛け布団として使う毛布のようなものです。輪のようになった布で、寒い時はそれを被^{かぶ}って坐禅をしていたのです。

寝る時に掛^かける寝具を被っている姿が有名な達磨さまって、恥ずかしくない？と思われる方もいらっしゃるかもしれません。

達磨さまがインドから中国に伝えた仏教は、後に「教外別伝」「不立文字」などと禅宗^{ぜんしゅう}の一派^{いっば}でいわれるように、経典^{きょうてん}などを学ぶことが中心の学問的仏教とは違い、考え方や生き方が重要で、そこから外れないように生活する姿こそが仏教だという、いわば実践の仏教なのです。その特徴として人々の目に映^{うつ}ったのが、寒い時にもあの「被（ひ）」を被って坐禅をする達磨さまの姿であったのでしょうか。

よく、悟^{さと}りを得たと自^え称^{じしょう}している人が、達観^{たっかん}した行為として常識から外れた事をやって見せたりしますが、それでは仏教ではなくなってしまい、別の宗教になってしまうのです。

達磨さまは、寝る時に掛ける寝具を被るという非常識を、これ見よがしにやって見せたわけではありません。仏教とは、寝^ね起^おきつまり行住坐臥^{ぎょうじゅうざが}の中にもあるということ
・・日常生活そのものなのだと、示されたのです。

こうそどうげん ^{ふかんざぜんぎ}
高祖道元さまが『普勧坐禅儀』の中で、

「謂ゆる坐禅は習禅には非ず」(何かを習得するために坐禅をするのではない)
と言われたのと同じように、ただただ「在るべきよう」に精進すれば良いのです。

この「在るべきよう」とは、自分の損得で考えず、感情や世の中に流されず、間違
った方に進まぬように努力し続ける事です。努力が無ければ、「在るべきよう」ではな
く、自分や周りに流されてしまうだけです。

達磨さまは、お経や概念のだけの仏教ではなく、仏教とはそういう生活・生き方そ
のものであるということを伝えられた方なのです。

— 終 —